

女性にとっての“ふるさと”と定住願望 (4)

武 田 圭 太

問 題

子育て中や子育てがほぼ終わった主婦たちのなかに、子どもから離れ家の外に出て隣近所の人たちと社会活動に参加する行動がみられる(荒金・川端・森野, 1993; 地域づくり団体全国協議会, 1998)。家の内で閉じ籠るように子どもと向き合う毎日に、自己の存在感が揺らぎ漠然と不安に駆られる主婦もいるようで、社会、つまり、家の外の世界とかかわりたいという願望から、身近な社会活動に動機づけられるのだろう。

一般に、結婚した女性に期待される子を産み育てることが一段落すると、彼女たちは、子どもに費やしていた時間と労力を別の何かに注ぐことを考え始めるようである。一部の女性は、隣近所に声をかけて仲間を集め、家事や仕事の合間にまちづくりの活動に取り組んでいる。彼女たちは、似たような状況にある人に声をかけてみんなの活動を組織化している。その活動や組織は周囲から承認され、まちなかに意味のある存在として自分たち自身の居場所をつくりあげている。

女性によるまちづくりは、これまで男性が男性のやり方で行ってきたまちの活動にはみられない目標を掲げ、独自の視点から暮らしを気持ちよくしようとする取り組みである。そうした取り組みが組織化されていることは、組織の目標に賛同し協働する仲間が少な

からずいて、社会的に受け容れられた活動であることを証明している。

彼女たちの目標は、自身の暮らしをより快適にしたいという利己的な願望を原動力に、隣近所と気持ちよく暮らせる環境の実現・整備を目指して設定されているので、一人ひとりの組織への関与は強い。当初の利己的な願望は、共感する仲間が増えていくのに伴って、いろいろな利害関係者がかかわるようになり、しだいに公共性を帯び利他的な性格へ変わっていくと考えられる。このような非営利活動は、経済低成長期を生き生きと暮らす指針として参考になるだろう。

安くて便利な製品やサービスを効率よく大量に生産し、たくさんの人に供給することで経済成長を持続してきた前世紀までと違い、右肩上がりの高揚感を実感しづらい低成長期に入った今世紀では、短期的な経済合理性だけを考えて毎日を過ごすわけにはいなくなった。これまで専ら物質面の豊かさばかりを追求してきたが、その成果を基盤とする生活を確立したとは未だ言い難く、日常にはまだ多くの不安が取り巻いているように思える。最近、経済学の分野で、幸福や幸せを主題とする文献が刊行されていることも興味深い(Graham, 2011; 橘木, 2013)。

生きていることを実感でき、満足し充実した毎日を過ごすには、①人の役に立つこと、②人に存在を認められること、③人といっし

よにいられる居場所があることが必要とされる(佐藤・土井・平塚, 2011)。この要件を充足できるなら、孤独や不安に苛まれることはないだろう。気持ちよく暮らすには、他の人とかかわって、感情や考えを交換し、互いに理解し合う行為が基本となる。

そこで、近所の人たちと協働して気持ちよく暮らそうと、主体的に活動している女性に注目した。これまでみてきた過疎化が進む中山間地(武田, 2008, 2011, 2012, 2013)とは異なる事情にあるまちなかで、彼女たちは、周囲の人たちと支え合いながら共生しようと試行錯誤している。暮らしを気持ちよくするための試行錯誤は、活動の構造ではなく人と人との関係性の質を問題にするので、数値化しにくい特性を検討しなければならない(Granovetter, 1973; Watts, 1999, 2003; Watts & Strogatz, 1998)。本稿では、女性の地域活動の事例にもとづいて、主婦がまちづくりの人的ネットワークをどのように形成したのか、また、どのような人がまちづくりで中核的な活躍をしているのかについて考えてみたい。

方 法

調査対象 原調査は、愛知県G市商店街のリーダーaと、静岡県Y市のNPO法人理事長bを対象にした。

G市商店街は、JR東海道線G駅北口近辺に、東西南北を結ぶいくつかの通り沿いに117店舗が店をかまえている。商店街は、各通り別に下部組織を形成し全体を構成している。G市のほぼ中心地にある商店街なのに、高齢化が進み跡取りの悩みを抱えている店は少なくないようである。

そのなかで、まちを少しでも元気にしようと活動しているおかみさんたちの組織がある。まちづくりのリーダーは、男性が務めることが多いので、女性リーダーaがどのような活動をしているのかを明らかにしたい。

静岡県Y市のNPO法人は、1人の専業主婦bが、近所の小学校でパソコンの非常勤講師を引き受けたことが始まりで、パソコンやインターネットの楽しさを体験しようと主婦を集めて自主勉強会を続けるうち、身の周りの小さな地域活動を依頼されるようになり、しだいに組織として整備されNPO法人格を取得するまでに成長した。

bは、主婦の感性や視点から、これまで男性が手をつけていなかった領域で独自の活動を展開し、リーダーとして着実に組織化を推進してきた。パソコン好きの主婦の集団が、地域活動の一翼を担うまで成長した過程で経験したことをbに尋ねる。

調査方法 原調査は、気持ちよく暮らすためにしていることや、仲間との関係、活動を継続するうえでの問題などを中心に、調査対象者が自身の経験をどのように認知しているかについて、できる限り自由に回答してもらおうと構造化されていない面接法で行った。この方法によると、回答者は自身の意見の内容とそれを表明する時間の長さを完全に統制できる。面接時間は、それぞれ約2時間だった。

約2時間の聴き取りは、調査対象者2人がそれぞれ異なる話を展開させて終了したが、共通の話題として、①中核人材になる勇氣、②意思疎通する場の設定、③参加のきまり、④経済的な負担の解消、⑤気持ちよい暮らしの自己増殖化に言及するよう促した。

調査時期 aとbへの聴き取り調査は、2011(平成23)年6月、個別に行った。

分析手続 本稿では、既述した5つの共通の話題を中心に、2人の証言を要約し、その内容を検討しながら気持ちよく暮らすためのコツについて考えてみたい。

なお、証言のなかで、調査対象者やその関係者を特定し得ると考えられる人名や地名などは省略し記述した。

結果と考察

笑えるアイデア 日常生活で、みんながあたりまえと思っていることとズレているので愉快地笑える行為には、気持ちよく暮らすための知恵が潜んでいるかもしれない。暮らしをより楽しむため、これまでと違うやり方で笑えるアイデアを実践してみたいと思う。笑いの理論の本質は、「そうなるのはあたりまえ」と予期されることとズレた発想にある (Morreall, 1983)。そして、その発想は、嘲笑や差別ではなく愉快的笑いでなければならない。

a と b の活動にも日常の常識とズレた発想が認められ、彼女らが周囲の目を気にしないように心がけてやったことが予想外の成果をもたらした。

例えば、G市商店街では、駐車帯に車を止めた買い物客が、車から降りようとドアを開けると、車道と歩道との境目に立っている支柱にドアをぶつけて傷つけることがときどき起きていた。運転席からは支柱の位置が見えにくいからである。

おかみさんたちは何とかならないかと思案し、支柱を取り除くことを (G市に) 問い合わせたが、「支柱は歩行者の安全のためなので、それを取り除くと (歩行者が) 危険になるからだめだ」と言われた。

「そこで、支柱に緑色のロープを巻いたら目につくし、クッションにもなっていいだろうと思いついて、みんなで手分けして支柱にロープを巻きつける作業をした。せっかくロープを巻くなら、ついでに絵を飾って通りを歩く人に見てもらおうと考え、幼稚園や老人会や児童館などに依頼して、商店街の通りにふさわしい絵を描いてもらい、それを支柱の上に乗せてロープをかけるようにした」。

その結果、「車に傷がつかなかったわ」と買い物客が喜んでくれるようになった。今でもロープ巻は続いている。それに、商店街を

歩きながら動物や花の絵を楽しめるようにもなった。

G市は繊維ロープの生産量が日本でも有数のまちで、「商店街の支柱にロープを巻きたい」という a たちの要望が G 新聞に載ったところ、ロープを製造している地元企業が緑のロープを提供してくれたという。a たちの活動に地元企業が呼応して、地域内の組織間に新たな関係が形成された。

ここでは、「商店街の支柱に緑色のロープを巻いて、その上に動物や花の絵を飾る」というアイデアが笑える、つまり、常識とは違う発想ということができる。買い物客が困らないようにしたいという配慮に加えて、公共の空間を少しでも美しく飾るという行為が気持ちのよい環境を生み出した。

「1998 (平成10) 年当時、小学校2年生と幼稚園年長児の男の子2人の子育てに追われる専業主婦だった私に、突然、再就職のお話が舞い込んできた。再就職といっても、夫は夜中まで帰ってこない仕事人間なので、家事や育児の協力がまるで期待できない私には、いきなりフルタイムの正社員では (再就職は) 難しい状況だった。そんな私にいただいたお話は、週に2日1回3時間と、社会への再チャレンジの第一歩としては、願ってもない条件で、近くの小学校でパソコンの非常勤講師というのが、そのお仕事だった」。

専業主婦だった b がいきなり小学校の先生になるという意外性に、常識とは違う状況での笑える意思決定が認められる。このときの心理状態について語った b の話から、ともかく新しいことには挑戦してみようという b の楽観的な性格が感じ取れる。

「子どもを産んでから、しばらく家庭に入っていたので、仕事を始めるということ自体、楽しみな反面、不安もあったし、ましてやふつうの会社勤務と違って、小学校の先生という、全く初めてのチャレンジだった。『はたして自分に務まるのだろうか?』と思

いつつも、子どもたちにパソコンを教える仕事なんて、めったにあるものではない。『これはもしかすると、貴重なチャンスなのかも』と思い直し、お引き受けすることにした」。

「事前の打ち合わせでは、『授業は（小学校の）先生が進めるので、サポートしてくれればいいですよ』というお話だった。しかし、お忙しい先生方とは事前の打ち合わせ時間をとることができず、小学校1年生から6年生まで、次に授業にやってくる子どもたちの学年は、部屋に入ってくるまで全くわからないという凄まじい状況だった。今思えば、よくそれで授業ができたと思う。でも、そこは若さというか、知らない怖さというか、当時の私は『条件が違うので断る』とか『業務改善のために交渉する』ということをしらなかった。とにかく一度お引き受けしたことは、最後までやり遂げなければならぬと思っていたし、そうこうしているうちに、（この学校は県内でも上位に入るくらいの大規模校で、1学年5～6クラスあったので）一度成功した授業カリキュラムは、『最低5回は使いまわせる！』ということに気づいてしまった」。

「知らない怖さ」からやったことは、例え失敗しても許されるだろうし、その経験を次の機会に生かすこともできるだろう。重要なことは、「知らない怖さ」を感じる眼前の状況から逃げ出さずやってみることであり、それが新しいことへの挑戦なのである。bが逃げずに挑戦してみようと決めたのは、「とにかく一度お引き受けしたことは、最後までやり遂げなければならぬと思っていた」という課題達成の責任感と信念からだといえよう。

志を抱いた中核人材になる勇氣 集団や組織は、リーダーとフォロワーの関係によって維持される。仲間意識が強い集団・組織の場合、活動をまとめる役割のリーダーは、自身の志を仲間に語ってフォロワーを動かす勢力

(power) を得ようである。

G市商店街は、今、「高齢者が増えて若い人が減ったので、祭りなどの行事ができなくなってしまった。後継者がいないので店主はお年寄りが多く、まちづくりに元気よく取り組もうという活気が生まれてこないと嘆く人もいる。最近では、商店街の人たちのつながりもしだいに希薄になってしまい、隣の家の娘さんが結婚したとか、前の家に赤ちゃんが生まれたというような周りの店で起きている身近な出来事さえよくわからないという声も聞かれる」。

こうした現状を寂しいと感じて何とかしたいと思っているのに、何をどうしたらいいのかわからないという声も少なくない。

「まちをよくしたいと思っても、少数の力では簡単に変えられるものではないと、もどかしく思いながら諦めている人がいる。また、余所から（商店街がある地区に）移住してきた人のなかには、住んでいる地区のなかで孤立し、周囲の人とうまくつき合えないと悩んでいる人もいる。だんだん活気が失われていくまちを復活させたいと考えている人が、互いに結びついていないようである」。

そのなかで、aたちは、女性どうして話し合いながら、男性の活動を支援するという態度でまちづくりにかかわっている。

「商店街の女性は、自ら先頭に立って何かするというより、むしろ男性を支援する側に回る方がよい。商店街の清掃や近隣の学校との交流などをしながら、商店街の活性化運動に取り組んでいる」。

一方、bは、目標を掲げて自ら行動する自発性が重要と示唆する。

「人間は目標を持ち、それに向かって自発的な行動を起こすということが本当に大切ですね」。

パソコンやインターネット好きな主婦の自主勉強会がNPO法人に成長するまでには、地域内外と交流してきた豊富な実績がある。

「ドタバタの綱渡り授業が評価されたのかどうかはわからないが、1年契約だった(小学校の非常勤講師の)仕事は継続のご依頼をいただき、ほんの少し気持ちに余裕が出てきた頃、今度は地元の私立大学から非常勤講師のお話をいただいた。そうして、大学に通い出した頃、同時進行で主婦を集めてミセス・パソコン講座を始めた。主婦を集めて、パソコンやインターネットの楽しさに触れようという趣旨の講座である。3ヵ月の予定で始めた講座だったが、毎週顔を合わせているうちにメンバー間に仲間意識が芽生え、パソコンをもっと勉強したいという共通の学習意欲が高まり、自主勉強会を続けるサークルが生まれた」。

「しばらくすると、お母さんたちが、昼間、楽しみながらパソコンの勉強を続けているサークルに初めてのお仕事依頼が飛び込んできた。地元のスーパーのホーム・ページの更新作業を依頼されたのである。スーパーと主婦の相性の良さを基軸として、消費者目線で、四季折々のスーパーのイチオシ商品を取材し、そのレポートをホーム・ページにアップするというお仕事だった。これをきっかけにして、それぞれのメンバーのなかに、『私たちにも、もっとやれることがあるんじゃないか。社会貢献できることがあれば、役に立ちたい』という思いが育っていった。その後、小学校の夏休みに親子パソコン講座を企画したり、ボーイスカウトでパソコン指導したりなど、自分たちの身の周りにある小さな地域活動を積み重ねた3年間を経て、2003(平成15)年にNPO法人格を取得し、新たなスタートを切ることになり、私は理事長になった」。

「地域の情報化支援と女性の社会参加の応援をミッションに掲げ、パソコン好きの主婦をネットワーク化し、子どもが幼稚園や学校へ行っている昼間の時間をつなぎ合わせて、本格的な活動の再スタートとなった」。

「地域に目を向ければ、それぞれの生活の場に課題は山ほどある。それらを何とか解決しようと思ったときには、同じ思いをしている仲間を集め、コミュニティを作って課題解決にチャレンジするのも1つの方法である」。

「順調にNPO法人を育ててこられたのは、何より人に恵まれていたからだった。主婦の小さな任意サークルをNPO化したいと言ったときに、志を1つにして共にNPOセンターに足を運び、面倒な事務処理を手伝ってくれた副理事長、多様化していく事業にしっかりとついてきてくれたメンバーたち、そして、そういった活動を応援してくださった行政、関係団体、企業の皆様、そして何よりずっと私の活動を理解して協力と応援してくれた家族など、多くの人たちに支えられ、応援していただいた結果、今日がある」。

組織が成長していく過程で、b自身の志が仲間をまとめ組織を維持することに影響していることは明らかであるが、bの志に賛同し、bの志を他の構成員に間接的に説明して理解を求める拡声器のような機能をはたしているbに近い位置のフォロワーの存在も重要である。

意思疎通する場の設定 集団や組織の公式の場では、調整や意思決定など、従来のやり方を前提とした意見交換が多くなり、新しいやり方や常識とズレた笑えるアイデアは提案しにくいだろう。したがって、これまでの常識にとらわれず自由に意見を交換できる非公式の場を設けることが望ましい。

「仲間といっしょに活動すると、新しいアイデアがよく出てくる。アイデアは、みんなで机やテーブルを囲んで、『ではこれからじっくり議論しましょう』というような雰囲気の中の話し合いではなく、たまたま空いた時間に、お菓子を食べてお茶を飲みながら雑談しているときにふと思いつくことが多いような気がする」。

aへの聴き取り調査はaの店内で行った

が、調査をしている間も、何人かの人が入れ替わり店に入ってきて、仕事の連絡をしたり、家族や知り合いの近況についておしゃべりしたりして、取り留めもない会話を交わしていた。店内には、中央に小さなテーブルと椅子がいくつか置かれ、テーブルの上には菓子が入った器が用意されていて、誰でも気軽に腰かけて話ができるような空間になっている。このような店内の雰囲気は、特に用事はないけれど暇つぶしにちょっとのぞいてみるかというような気楽な訪問を促す効果があると思う。

aによると、「活動内容については、店ではなく別の場所で定期的に会合を開いて議論しているが、活動のアイディアは、定期会議の席上ではなく、店のなかで雑談しているときに生まれることが多い」。

無駄話は、効率よく生産活動しようとする場合は排除されるが、楽しむことを重視する活動には、そもそも無駄という観念はないと考えられる。無駄話、つまり、何かを決めなくてもよい話し合いは、遊びのアイディアの源泉といえよう。無駄話を始めると、おしゃべりが止まらなくなる人は少なくない。そういう人が自然に集まって来るような場をつくるのが、リーダーの1つの役割である。仲間との無駄話から笑えるアイディアが生まれるかもしれない。

また、日頃の活動で集団や組織内に発生する不要な緊張感を除くためにも、自由な感覚の意思疎通が必要である。

「NPO 法人の事業をきっかけにメンバーが次々と講師デビューをしていった。自分自身の先生デビューを思い出せば、初めて子どもたちの前に立ったメンバーの気持ちはよくわかる。最初こそ、『私には先生なんてとてもできない。人前で話をするなんて無理』と思うが、勇気づけ、励まし、ときには背中をバンバン押しながら、教壇に上ってもらった。すると、最初こそプレッシャーに押しつぶさ

れそうな顔をしているが、そこはやはりお母さん、すぐに子どもたちと打ち解け、和気あいあいとした楽しい雰囲気をつくっていく」。

「それから、メンバーの先生デビューを支えたもう1つの要因は、活動は1人でやるものではないというところにもあると思う。講座には必ずアシスタント・メンバーが同行して応援する。緊張感をほぐしたり、講座の準備をしたり、先生方との対応をしたり、細々と気を使ってくれる仲間がそばにすることが支えになって、立派なお母さん先生として責任を全うしていったのではないかと思う」。

参加のきまり 集団や組織を安定して長く維持するには、参加の自由度をどのようにするかという問題を考えねばならないだろう。活動に長く従事するうち、技能や知識は熟練していくので、みんなは、そうした人材を確保し、特定の役割を遂行して欲しいという期待を寄せるだろう。しかし、本人は、役割期待の軽重感と、本来の気持ちよく暮らしたい欲求との認知的な不協和を経験しているかもしれない。リーダーをはじめ仲間が、そうした状況をどのように理解するかという共通の認識が求められる。

「そういうボランティア活動をしたい人は、振興組合にいろいろな全然知らない人がいっぱい参加している。NPO 法人とか若者サポート・ステーションの所長とか、もちろん市役所の産業振興課の人たちはいつも会合に参加している。その他、クック・パートナー、国語の先生だったけど、学校を退職した後は本の読み聞かせをしている人、紙芝居を作る人など、いろいろな人が参加させて欲しいと会議に顔を出している。どんな人でもいいと思うので、どんどん参加して欲しい」。

たくさんの人が自由に参加して集団や組織が形成され、活動の規模が大きくなるにつれて構成員も増えると、一人ひとりの喜びや楽しさを個別に追求することがしだいに難しく

なる。みんなが同じくらいに気持ちよく楽しめる活動には、集団や組織の最適な規模があるのかもしれない。aたちの集団も、当初は50人から始まったのに現在の会員は16人である。

しかし、aは「でも今が一番やりやすい。やっぱり本当に前向きの人が多い。とにかくいいと思ったことは何でもやってみようって言うってくれる人がほとんどなので、とってもやりやすい。この集団ができる前は、ご近所でもほとんど口を聞いたことがなかった。私たちって自分の店をほったらかしにして(外に出るわけにはいかないじゃない。お友だちとか知り合いとか本当にできなかったんだけど、この集団ができたおかげで、まちなかに仲間がいっぱいできて、ちょっと(外に出るとあっちからもこっちからも声がかかる。私はこの集団ができて本当によくなったって思っている)。

仲間の数を増やすことや全員が必ず参加することを指すと、無理に楽しむような雰囲気になりがちである。去る者は追わず、来る者は拒まずという大らかさが、居心地のよい集まりにするのかもしれない。

「このNPO法人は、元気なミセスのネットワークを最初のキャッチ・フレーズにしたもんですから、ミセスだけでスタートしている。女子高みたいで非常に居心地がいい。女ばかりで、言いたいことを言って活動している」。

「主婦のサークルということで子育て中の主婦が中心になっている。それで、独身の女性が来てくれるとありがたい。家にいてくれなきゃ困るとご主人が言う家庭もあるので、主婦の方は夜の講座の対応などが難しい。ネットワーク教室をやるなかで、夜7時からPTAの会合があるので、そこで話してくれというような依頼も多くて、また、土曜日とか日曜日は、家庭のある方は外に出にくい事情もあるので、独身の方に手伝ってもらえる

と非常にありがたい。仕事をしながらNPOで活躍されている独身者もいらっしゃる。彼女たちは、フットワークが軽いつていうか、自分の時間を自由に使えるってところが強みかなと思う」。

自由な参加も生活時間の自己管理が基本であり、それに加えて、既婚者は家族、特に配偶者の理解と支援によるところが大きいといえよう。

経済的な負担の解消 参加のきまりと同様に、活動を維持するうえで決めておかねばならないのが必要な経費をどのように賄うかという問題である。無償のボランティアが理想とはいえ、実際に発生する支出への対処は明確にしておく必要があるだろう。

「そして、活動したメンバーには必ず謝金を払うということを決めた。基本的にボランティアはやらない方針である。ボランティアを否定するわけではないが、報酬がないということは、どうしても責任感が薄くなりがちである。急に熱を出した子どもを夫に預けて家を空けるにも、無給のボランティアに出ると、報酬をもらう活動(=仕事)に出るとでは家族からの理解も違う。それに、団体の発足当初は熱い思いでボランティア活動ができて、長く継続するには、緩やかではあっても、ある程度は給与規定をはじめとしたルールが必要だった」。

気持ちよい暮らしの自己増殖化 集団・組織活動が順調に進むときさまざまな交流をとおして、新たな展開をみることになる。所属組織を離れた仲間が別の集団や組織を形成して、同じような趣旨の活動が広がることもある。

「地域での仲間づくりの場としても、パソコン講座はお役に立っているようである。さらに、地方公共団体との協働もスタートした。これは、Y市とF市が共同で運営する地方公共団体の公式サイトをなかで、地域のお店を取材し、レポートを掲載するというもの

である。これは、先のスーパーと同様、主婦の集まりである私たちにぴったりのお仕事である。するどい消費者目線、女性の感性を活かした丁寧な取材は、協力してくださる店舗の皆様にも、そしてもちろんホーム・ページに訪れてくれる地域の皆様にもご好評をいただき、順調にアクセス数を伸ばした。

「さて、もう1つのミッション、女性の社会参加の応援活動としては、再就職を目指す子育て中のお母さんたちを対象としたチャレンジ支援講座を開催してきた。女性の気持ちは女性である私たちが一番よく知っているということで、自分たちのニーズと照らし合わせて付加価値をつけ、より受講生に喜んでいただける内容へのブラッシュ・アップをはかった」。

「さまざまな活動にチャレンジしてきたが、とりわけ現在の活動の柱となっているのがネット安全事業である。母親のグループなので、インターネットの楽しさだけを伝えては、これからの子どもたちが心配だということになり、小学校高学年を対象としたインターネット安全教室の出前講座を企画した。教案はもちろんメンバーの知恵を集めての自前である。次の課題は、どこで出前講座を実施するかという学校探しである。いくらよい講座を作っても、それを受け入れてくれる学校がなければ活動にならない。そこで、ここでも母親集団の強みを活かした営業活動が始まった。まずは自分の子どもが通う小学校へアタックした。ちょうどPTAの役員をやっていたことから、幸い教頭先生とはとても話がしやすい関係があった。放課後、学校へ押しかけては、これからの子どもたちにこの講座がいかに必要であるかを力説し続け、何とか開講までこぎつけた」。

「この間、理事に就任したこともあり、ここ数年はNPO法人静岡県男女共同参画センター交流会議とコラボでの就労支援講座が、

活発に行われている。自分たちだけで企画運営する達成感も楽しいが、他の団体と協働することで、活動により広がりを持つ、得意分野を分割することでより効率的な活動ができているように思う」。

活動が過重にならないように考慮しつつ無理なくできることを丁寧に継続することが、気持ちよい暮らしを共有できる仲間を増やすことにつながると思われる。

引用文献

- 荒金雅子・川端美智子・森野和子 1993『地域リーダーカー女性リーダーの育ち方・育て方』パド・ウィメンズ・オフィス
- 地域づくり団体全国協議会 1998『女性によるまちづくりハンドブック』ハーベスト出版
- Graham, C. 2011 *The pursuit of happiness: An economy of well-being*. Washington, D.C.: Brookings Institution Press. (多田洋介 訳 2013『幸福の経済学一人々を豊かにするものは何か』日本経済新聞出版社)
- Granovetter, M.S. 1973 The strength of weak ties. *American Journal of Sociology*, **78** (6), 1360-1380.
- Morreall, J. 1983 *Taking laughter seriously*. New York: State University of New York Press. (森下伸也 訳 1995『ユーモア社会をもとめて一笑の人間学一』新曜社)
- 佐藤友美子・土井勉・平塚伸治 2011『つながりのコミュニティ人と地域が「生きる」かたち』岩波書店
- 橘木俊詔 2013『「幸せ」の経済学』岩波書店
- 武田圭太 2008『ふるさとの誘因』学文社
- 武田圭太 2011「女性にとっての“ふるさと”と定住願望(1)」『愛知大学総合郷土研究所紀要』**56**, 39-49.
- 武田圭太 2012「女性にとっての“ふるさと”と定住願望(2)」『愛知大学総合郷土研究所紀要』**57**, 23-31.
- 武田圭太 2013「女性にとっての“ふるさと”と定住願望(3)」『愛知大学総合郷土研究所紀要』**58**, 23-33.
- Watts, D.J. 1999 Network, dynamics, and the small-world phenomenon. *American Journal of Sociology*, **105**, 493-527.
- Watts, D.J. 2003 *Six degrees: The science of a connected age*. New York: W.W. Norton.
- Watts, D.J., & Strogatz, S. 1998 Collective dynamics of small-world networks. *Nature*, **393**, 440-442.